

# イブニング・ミーティング 参加体験記

登壇者：鈴木孫和先生・小南悠先生

2024年7月18日の夕方、文学部人文研究センターにてイブニング・ミーティングが開催された。登壇者は、昨年度に英米文学専修の助教として着任された鈴木孫和先生と小南悠先生のお二方である。

まず、イギリス文学がご専門の鈴木先生は「伝記文学と科学の交錯——J・L・テイラーとヴァージニア・ウルフの場合」と題し、先生の研究テーマである「ライフ・ライティング」についてお話しいただいた。伝記を包括する広義なライフ・ライティングは、周縁化された書き手に光を当てるジャンルである。鈴木先生のご関心は、19世紀末から20世紀初頭のイギリスにあり、文学と科学の相互関係をみることにある。ヴァージニア・ウルフは、ヴィクトリア朝と20世紀の伝記を差別化し、「新しい伝記」の特徴のひとつに「内面の重視」を挙げている。しかし、ウルフの父であり、全66巻から成る『英国国民伝記事典』の初代編集者でもあったレズリー・スティーヴンが言及していたように、個人の内面を重視する「新しい伝記」の潮流は、19世紀後半から存在していた。さらに、19世紀半ばにおいて、伝記は優生学の理論構築に利用されていた。しかし、科学に対する抵抗と容認の立場のなかで、すべての伝記作家が優生学に懐柔されることを安易に認めていたわけではない。ライフ・ライティングは世界的に盛り上がりを見せている研究領域であり、今後もさらなる発展が期待されているとのお話だった。

質疑応答の際、「伝記を科学の根拠として扱うことに信頼性はあったのか？」という質問があった。鈴木先生によれば、ジリアン・ピアが指摘しているように、文学を科学の根拠として扱うことはよくあることだった。具体的に、文学と科学が未分化だった19世紀中頃において、包括的なジャンルであった心理学が科学として制度化されていくことで、科学と文学の間に距離が生じる。しかし、20世紀にフロイトが登場することによって文学と科学が再び繋がる時代を迎えることになるといい、鈴木先生は文学と科学の交錯性をここでも強調されていた。

文学(伝記)が科学(優生学)の正当性を証明する手段として信頼されていた時代があったことには驚いたが、文学作品において、人物の身体的特徴を性格と結びつけて表現するために、人相学や骨相学などの科学が多用されていたことを思い返すと、文学と科学が絶えず互いの存在を必要としていることも理解に難くはないのではないかと思った。私は19世紀アメリカ文学の小説を研究しているが、扱う作品の作家がどのような人生を送ってきたのかについて、伝記から情報を得ようとするのであれば、伝記もまた文学ジャンルのひとつであり、当時の諸科学からの影響を受けたテキストであることを忘れないようにしたい。

次に、アメリカ文学がご専門の小南先生より、「文学部の教員は何を研究しているか——ハーマン・メルヴィルの文学紹介」と題し、メルヴィルに関する先生のご研究についてお話しいただいた。先行研究におい

て、メルヴィル作品における〈欠陥〉は度々批判対象となってきた。しかし、メルヴィル作品に現れる誤植は、作家や校正者の不注意から生じた〈欠陥〉とは必ずしも言い切れない。小南先生は、〈欠陥〉への自己言及を繰り返すメルヴィルが、戦略的に誤植を修辞として用いているのではないかと主張する。具体的に、『タイプ』(1846年)における主人公の旅路が西漸運動と重なり合うように地理を書き換えることで意図的な誤謬が生じていたり、「書記人バートルビー」(1853年)における語り手の当惑が文法破格として現れていたりする。さらに、語り手が自身のアイデンティティについて悩む「ピアザ」(1856年)では、自己に対する困惑が意図的な主語の消去や重複に込められている。このように、ネガティブに捉えられがちな誤植を歴史的かつ内容的に考察することで、技巧的な作家としてのメルヴィルに対する再評価が迫られる、と先生は結論づけられた。

小南先生のご発表は、ご自身の博士論文を取り上げるかたちで行われた。文法破格や非一貫性などの誤りを不注意の産物として片づけるのではなく、「メルヴィル作品に多くみられる誤植を単なる〈欠陥〉として片づけてよいものなのか？」という素朴な疑問からテーマを立ち上げ、複数の作品を横断するかたちでメルヴィルの作家像を探る論の組み立て方は、今後、私自身が修士論文を本格的に執筆する上で非常に有意義な学びだった。

質疑応答の際、参加者より「結果的に、誤植を肯定的に読み進めたことで、文学作品に〈欠陥〉はないというイデオロギーを暗に認めていることになるのではないかと？」という質問があった。小南先生は、ご自身の論文が文豪メルヴィルを肯定的に捉えることが前提となっていることを認められた上で、書かれているものを一歩引いて見ることで、テキストの流動性を高めることに貢献できるのではないかとご回答された。単なるミスであるかのようにみえる些細な誤植さえも作家のコントロール下にある可能性が浮上したとき、テキストは本質的に事実を伝えるものではなく、書き手の思惑が凝縮されたものであることを再確認した。

小笠原 菜津子(文学研究科英米文学専攻博士課程前期課程2年)